

魔法少女かなた☆マギカ

大蟹Lv14

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは『コピー能力』という不思議な固有魔法を持った魔法少女の物語。

# 目次

キャラクター紹介	1
プロローグ	4
遙花星空	14
星空について	20
始まりのいろは	
邂逅	

## キャラ紹介

遥花<sup>ハルカ</sup>星空<sup>カナタ</sup>

性別：女性

出身地：神浜市

学校：南風自由学園

年齢／学生：18歳／高校3年生

肩書き：魔法少女

願い事：不明

固有魔法：固有魔法と服装のコピー

ソウルジェムの形状／色／位置：星形／ピンク／胸

容姿

アルビノ、ロングヘア

身長およそ140cm

AとBカップ

天真爛漫で自由気ままな少女。

一人称は『ボク』

自分が記憶喪失だというのに、まるで気にしていないかのような振る舞う。本人曰く、「そのうち思い出すから大丈夫!」との事。

時々、不思議な夢を見るらしく、その時は中々起きないらしい(友人談)。

食べる事が好きで、体格に合わないくらい食事をする事が多い。その為、彼女の事は『アルビノの大食い少女』という二つ名が付けられた。(本人は全く知らない)

歌はかなりの音痴で彼女が歌えばあたりの建物にヒビが入り、周りにいる人は倒れる。(完全にジャ○アン) しかも本人は気づいておらず悪気が無いのでタチが悪い。

当初はどこに住むのかわからず、その後やちよのみかづき荘で暮らす事になった。(その際、やちよと十七夜で何故か取り合いになっ

たらしい。)

座右の銘は「明日には明日の風が吹く」らしい。

魔法少女時の服はピンクを主としたフリフリの服。所々に星の柄が散りばめられている。頭に星型の髪飾りとリボンが付けられている。

先に星が付いたステッキを持っている。

固有魔法が他の魔法少女の能力と姿(というか服)をコピーすることができる。

入手する方法は直接その魔法を見るか、頭に触れてその魔法を知るかの2種類。ストックはいくらでもあるため、上書きする必要はない。

魔法少女達の間では『アルビノのモノマネ魔法少女』として知られている。(当然、本人は知らない)

マジア(必殺技)

スターアライズ

ステッキに力を溜めて放つ事で発動する。ただし、溜めるのに時間がかかる為、他の魔法少女が時間稼ぎをしなければならぬ。

ドツペル

真名「nada」

虚無のドツペル

その姿は悪魔の鳥

この感情の主は何も考えず、なんの感情も持たず、ただ目の前の敵を殲滅し、ただただ天を飛翔し、全てを破壊し尽くす。

更にこのドツペルは主の心情には無い憎悪、執念、嫉妬等の念が渦巻いてできている。

交友関係

七海やちよ||同居人、友達

由比鶴乃||友達

十咎ももこ||友達

八雲みたま||友達

雪野かなえ||友達(死去)

安名メル 〓 友達 (死去)

梓みふゆ 〓 友達 (行方不明)

和泉十七夜 〓 友達

都ひなの 〓 クラスメイト、友達

観鳥令 〓 同じ学校の生徒

## プロローグ 遥花星空

不思議な夢を見る。

ボクは“ナニカ”の中にいた。

そこに4人の何者かが現れた。

1人は体格が大きいガウンを着て、サンタさんが被るような帽子を被り、手に木でできた大槌を持った青いペンギンの様な者。

1人は一頭身で仮面を付け、更にはマントをつけて金色の剣を持った者。

1人はさつきと同じ様に一頭身で橙色の身体、頭に青いバンダナを被り手に槍を持った者。

そして、最後の1人は、ピンク色にまん丸とした体。その目に強い意志を持った青い瞳。

まるで、希望を具現化させたかのような者だった。

「起きろー！・遥花！・」

「ひゃい!？」

突如として聞こえた大声にガタンツと音をあげて起き上がった。

その声に周りにいた数名の人はこちらに視線を向けた。

私は何が起こったのかがわからず、キョロキョロと周りを見渡す。

「やっと起きたか、<sup>カナタ</sup>星空。」

声が出た方に視線を向ければ制服の上にダボダボの白衣を纏った小学生位の女子がいた。

その少女は目をキツと鋭くさせてこちらを見ていた。

その少女を確認すると起き上がった少女は机に突っ伏した。

「なんだひなのちゃんか。いきなり苗字で呼ばないでよ。まだ授業中なのかと思ってビックリしたよ。」

「どんなに呼んでも呼んでも起きなかつたお前が悪いだろ。」

「おっしやる通りです……。」

『星空』と呼ばれた少女がそう言うのと『ひなの』と呼ばれた少女は「ハア……」とため息をついた。

それを見ていた周りの生徒がクスクスと笑っていた。

「お前が呼び掛けにも答えず、寝言無しにも寝ているのは珍しいな。何時もは声をかければ直ぐに起きるし、寝言では何時も「もつとご飯頂戴」とか言ってるのな。」

「ボク普段そんな寝言言ってるの?」

「言ってるぞ。」

「そ……そうなんだ……。」

その言葉に星空は苦笑いをしながら、先程見ていた夢の内容をひなのに話した。

それを聞いたひなのは若干、呆れたような声で星空に言った。

「……なんだその内容は……」

「え……ええと……さあ?」

ひなのの質問に内容を伝えた本人でさえも疑問を浮かべた。

それを見てひなのは再びため息をついた。

「あれ?そう言えばひなのちゃんはボクになんか様なの?この後予定あつたっけ?」

「お、お前な……」

星空の質問にひなのは頭に手を当てて呆れながら言った

「今日期間限定のジャンボパフェを食べるって言って忘れるやつがあるか?」

「……………ああ!?そうだった!!」

ひなのの言ったことに星空は徐々に顔を青ざめて思い出したかの様にガタンツと音をあげて立ち上がった。

「い、急がなきゃ!!じゃあね!ひなのちゃん!!」

「あ、おい！星空！バック！バック!!」

「そ、そうだった!!ありがとう！ひなのちゃん!!」

慌ただしく教室を飛び出して行った星空を見てひなのはやれやれと呆れた後、帰り支度を始めた。

☆

「いや〜良かった〜。間に合って」

あの後星空は急いで期間限定のジャンボパフェが売っている店に向かい、店員にジャンボパフェがあるかとたずねた。

どうやらジャンボパフェは残り一つだったらしく、星空はそれを聞いて冷や汗を流し、心の中で起こしてくれたひなのに感謝をしてジャンボパフェを頼んだ。

「まだかな〜♪まだかな〜♪」

星空は左右に揺れながらジャンボパフェが来るのを待っていた。

それを見ていた周りの客や店員は微笑ましく見ていた。当の本人はジャンボパフェの事で頭がいっぱいになって気づいていなかった。

「お待ちせ致しました。ジャンボパフェです。」

「やったー♪頂きまーす!」

星空がそう言うときすぐ様スプーン持ってジャンボパフェのクリームを口に運んだ。

「ん〜♪美味し〜♪」

まさに至福と呼べるような味に（星空にとって）頬を緩ませて感想を述べた。その美味しさに星空は次々とジャンボパフェを食べていった。

「ねえねえ『口寄せ神社』って知ってる?」

「え?何それ?」

「んむ?」

ふと、近くの席からそんな話が聞こえ星空は（食べながらも）その話を聞き入った。

「なんでもそんな噂があるみたいだよ?」

「また噂?最近多いよね。」

「……………」（コクコク）

星空はその話を聞いて頷いてみせた。

ここ、神戸市と呼ばれる場所では噂話に尾ひれが付いて広まりやすい風土がある。

傭兵や花裂け女、絶交ルールなどの噂が広がっている。

星空はそんな事を考えながら（そして食べながら）近くの席にいる少女達の話聞いていた。

「それ、どんな噂なの？」

「えつとね……」

▽

アラもう聞いた？誰から聞いた？

口寄せ神社のそのウワサ

家族？恋人？赤の他人？

心の底からアイタイのなら

こちらの神様にお任せを！

絵馬にその人の名前を書いて

行儀良くちゃんとお参りすれば

アイタイ人に逢わせてくれる

だけでもゴヨージン！

幸せすぎて帰られないって

水名区の人の間ではもっぱらのウワサ

キヤーコワイ！

▽

「ちよ、ちよつと待って！なに、その喋り方！」

「笑わないでよ！そういう喋り方だったの！」

（そんな噂があるんだ……。）

彼女の話した噂に星空はある事を考えていた。

それは先程見ていた夢。その中に出ていた4人、主にピンク色の体に真ん丸者。その者を見た時、星空は不意に『会いたい』と思っていた。何故、会いたいと思ったのかは分からない。自分自身とその者に接点など関係などない。そもそも会ったことすら一度もない。否、”記憶”がない。

「……………」

星空はそんな事を考えながら黙々食べ進めた。

☆

「ありがとうございますー!」

あの後ジャンボパフェを食べ終わり、会計を済ませた。腕時計を見ればそろそろ帰らなければ行けない時間だったため、星空は帰る場所へと向かった。

(口寄せ神社か……。)

星空は歩いている間、先程彼女たちが話していた口寄せ神社の噂を思い出していた。

(もし叶うのなら夢に出てきたあの子に会ってみたいなあ……。いやでも、名前知らないしそもそも人ですらないし……。それにどうして会いたいのか分からないし……。と言うか帰れないって言ってたし。)

星空はあれこれ考えながら帰る場所へと向かう。

その間、何度かぶつかりそうになったがどういう訳か星空は考えながらも避けて行った。

(閑話休題)

しばらく考えて、最終的には噂に関わらない方がいいという結果になり、歩くスピードを早めた。

その時だった。

「っー!」

気配を感じた。何か不吉で嫌な気配がこの付近から感じた。

「この気配……まさか!?!」

その気配に心当たりがあるのか、星空はスマホを取り出し何かを打つとポケットにしまい気配の感じた方へと急いで向かっていった。

☆

「確か……こちら辺に……」

星空は気配がした場所に着くと左手を目の前に突き出した。

その瞬間、左手の中指に付けられていた指輪の宝石が光出した。すると目の前に何かが現れた。まるで、何かの“入口”のように。

「やっぱり……それに……他の子達の気配も……」

星空はそう言うのと再び指輪の宝石が光出した。否、それだけではない。今度は星空の全身が輝きその姿を変えた。

先程の制服の姿とは違いピンクを主にしたフリフリの服。胸には指輪の宝石と同じ色の星型の宝石が付けられていた。頭には星型の髪飾りと赤いリボンが着いていた。手には先端に星が付いた赤と白で彩られたステッキを持っていた。

『魔法少女』

絶望を振り撒く悪しき存在、『魔女』を倒す希望を振り撒く存在。

彼女、『ハルカカナタ遙花星空』もその一人。

星空は魔法少女へと変身すると目の前にある、『魔女の結界』の入口に飛び込んだ。

☆

魔女の結界内では3人の魔法少女達が目の前にいる『立ち耳の魔女』と戦っている。

1人は銀色の髪でアイドル衣装の様な姿で棒の両端に蝶の羽根型の刃が付いたナギナタに似た武器を持った魔法少女。

1人は黄色の髪で銀髪の少女と同じアイドル衣装の様な姿で斧に似た独特の形状の武器を両手に持っている。

1人はピンク色の髪でこちらも同じ様にアイドル衣装の様な服で弓のような形状の巨大な斧を持っている。

並ぶとまるでアイドルグループの様な3人は現在苦戦を強いられていた。

何時もは短時間で終わる魔女退治だが最近、魔女がやけに強くなつており倒すのが1人では中々に困難になっていた。

「…くっ。」

「ちよつとこれは…キツイかな…?」

「あ、あちし…もうダメ…。」

既に彼女たちの体力は限界に近づいていた。

特に最後に言葉を発した少女は体力が限界だった。

当然、魔女はその隙を逃さず体力が限界の少女に向けて攻撃を仕掛けた。

「あやめ!!」

「!?」

2人が彼女の名前を叫ぶも既に体力が限界のため動けなかった。死ぬ恐怖に彼女は思わず目を瞑った。

まさに絶体絶命とも呼ぶべき状況……だったが。

《!?ゴオオオン!》

「!?」

「!?」

突如、星型の弾幕が直撃し魔女はバランスを崩し倒れた。

3人は突如飛んできた弾幕に驚き、飛んできた方向へと視線を向けた。

そこには白髪赤眼（所謂アルビノ）にピンクを主とした服を纏った少女が先端に星が付いたステッキを魔女に向けて立っていた。そう、先程魔女の結界に入った遥花星空だ。

星空は魔女が倒れたのを確認すると3人の元へと駆け寄った。

「大丈夫!」

「う、うん…」

「キミは…?」

黄色の髪の少女が星空に誰なのかと問いかけた。星空は腰に手を当て、元気よく自己紹介を始めた。

「遥花星空！南風自由学園高校三年生！好きなことは食べる事！宜しくね！」

笑顔で自己紹介を終えると3人の前へと立ち、次の攻撃が出来るように構えた。

「とりあえず君達は下がって！」

「ちよ、ちよつと待って！1人で戦う気!?無茶だつて！さつき私たちでも叶わなかったのに！」

「でも君達そろそろ体力の限界でしょ!?その子に関してはもう体力の限界だし！」

「まだ私たちは戦える！」

「無理！禁物!!絶対!!良いね!」

「け、けど！」

「！危ない！」

星空と黄色の髪の少女が言い争っていると立ち上がった魔女が星空に向けて攻撃を仕掛けた。銀髪の少女がいち早く気づき星空に向かって危険を知らせる。が。

《ガシツ》

「あーもう！今話してるのー！」

《ガ?ンツ》《ドゴオオオン》

「?!?!」

「?!?!」

星空は魔女の耳を掴むと壁に思いつき叩きつけた。

3人はその小さな体格とは裏腹の怪力で魔女を叩きつけた事に啞然とした。

星空は3人の方へと振り向き腰に手を当てて言った。

「君達は休んでて！良いね!？」

「け、けど私たちは…」

「良・い・ね？」

「……………はい。」

星空の気迫に押されて3人は了承せざるを得なかった。

星空は3人が了承したのを確認すると頷いて黄色の髪の少女によって頭に触れた。

「えっと…何を？」

「……………よし！」

星空の行動に疑問を持った銀髪の少女は星空に訪ねるが星空は立ち上がり魔女へと向いた。

魔女はふらつきながらも立ち上がり自身を壁に叩きつけた星空に視線を向けた。その目はまるで睨んでいるかのように。

「後は任せて。」

その言葉と共に星空は光に包まれる。

光が収まると星空の服は先程の服とは変わっていた。

アイドル衣装の様な服装で両手には斧に似た独特の形状の武器を

持っていた。

先程の黄色の髪の少女と同じ服装へと変化していた。

唯一違う所といえば、黄色いラインではなくピンク色のラインへと変わっていること。胸の下にあるソウルジェムが黄色の五枚花びらではなく、ピンク色の星型に変わっている事。

「う……うそ……。」

「私と……同じ格好!?!」

「ど……どうなって……。」

「行つくよー!」

驚く3人を他所に星空は一気に魔女まで近づき、両手に持った武器で斬りつけた。

「!?!」

「まだまだー!」

状況を把握できない魔女を無視して連続で斬りつける。魔女の力ウンターもあつたが星空は俊敏に避けて攻撃を続ける。

流石の魔女も攻撃され続ければ力尽きる。当然星空はその隙を逃さず一気に魔女との距離をあける。そして武器を高く上げてその武器に雷を纏わせた。武器はバチバチと鳴り、それを見た星空は構える。後は、必殺の一撃を放つのみ。

「はああああああああ……。」

狙いをしつかり定め、手に力を込める。魔女は流石に不味いと思つたのか、なんとか立ち上がり逃げようとする。が、それを簡単に逃がす星空では無い。

「サンダアアア・トレントオオオオ!!」

必殺の一撃、『サンダー・トレント』を魔女に向けて放つ。それは魔女のみ込まれるほどの大量の電気を本流の如く魔女に放出させ焼却する。魔女はその一撃に耐えきれず断末魔をあげることも出来ずに消滅した。

それと同時に魔女の結界は崩れていきやがて元いた場所へと戻っていた。

「やったー!大勝利!」

星空は喜びながら魔女の落とした戦利品回収した。

その様子を遠くで見っていた三人は絶句していた。

あれ程までに苦戦した魔女を彼女はたった一人で、しかも黄色の髪の毛の少女の“力”までも利用して魔女を倒した事に驚くしかない。

そして思った。

彼女はある意味恐ろしい存在だということに。

## 星空について

「……………」

「超特盛炒飯一丁！」

「やったー♪」

現在、星空と魔法の結界にいた3人の少女は『万々歳』に来ていた。目的としては話し合いをするため。

しかし、星空は店に入るやいなや店員の少女『由比鶴乃』に超特盛炒飯（星空用のメニュー）を頼んだ。

3人は自分の耳を疑ったがどうやら気のせいではなかったらしく、目の前に約5、6人前程は余裕であるであろう炒飯が置かれた。

流星にこの状況に言葉が一言も発せられず、ただただその現状に驚くしかない。

「いったただつきまーす♪」

「召し上がれー！」

そんな3人を他所に星空はレンゲを持ち、超特盛炒飯を食べ始めた。5、6人前もあった炒飯はありえない速さで減り続けた。

その状況に3人はさらに驚き、鶴乃とその父は笑っていた。

「ん〜♪美味しい〜♪」

「本当にいい食べっぷりだね、星空ちゃんは。」

「あれ？でも星空ちゃんは今日ジャンボパフェを食べてたんじゃなかったっけ？」

「そうだけど…なんで知ってるの？」

「星空ちゃんが来る前に来たお客さんが「遥花星空がジャンボパフェを見事完食したツイートが上がってきた」って話してたよ。」

「わお…。」

星空は自分が何か食べる度にその事が知られるのだろうかと考えていたが3人から言わせてみればジャンボパフェとやらを食べて、更に超特盛炒飯を食べていることに驚きが隠せなくなっていた。

一体、彼女の胃袋はどうなっているんだろうかと疑問を感じずには居られなかった。

「そう言えば君達は名前はなんて言うの？ボクは…もう名乗ったから良いよね。」

「あ…ああ、そうだったね。」

目の前のインパクトに3人は呆気にとられていて自己紹介をするのを忘れていた。

最初に我に返った黄色の髪の少女は自己紹介を始めた。

「私は遊佐葉月ユサハツキだよよろしくね。それで、私の隣の席に座っているのが静海シズミこのはで、君の隣に座ってるのが三栗あやめミクリアヤメだよ。」

「え、ええっ…。」

「よ、よろしくね…。」

「?どうしてそんな困った反応なの?」

「星空ちゃん。少しは自覚しよう?」  
「?」

葉月以外の2人の反応に星空は首を傾げるが、その理由を察した鶴乃は苦笑い気味に星空に言った。その後鶴乃は店の手伝いをし始め、星空は目の前にある超特盛炒飯をたいらげていった。その光景を3人はただ呆然と見るしかなかった。

「さてと…何を聞きたいんだっけ?」

「あ、ああそうだね。えっとじゃあ君の“あの力”なんだけど」

「ああ、アレね。」

食べる途中で星空は葉月の方に視線を向けて何を聞きたいのかを聞いた。その質問に葉月は先程の魔法の結界内で見せた星空の“コピー能力”について聞いた。

当然だ、いきなり自分と同じ姿になれば困惑せざるを得ない。

「あれは“コピー能力”って言って私の固有魔法だよ。」

「コピー…能力?」

「そう、直接魔法を見るか頭に触れるかでその人と同じ魔法が使えるの。」

星空は自身の固有魔法を一から全て葉月達に教えた。

それを聞いて葉月達は驚きでしか無かった。同時に疑問が浮かぶ。一体どんな願い事したらそんな魔法を手に入るのかと。

魔法少女になる為には「キュウベえ」と呼ばれる生き物と契約する事で魔法少女になる事ができる。その際、1つ願い事を叶えられる事ができる。そして、その願い事によって固有魔法が手に入る。

例えば、「誰かの傷を治したい」という願い事ならば治癒魔法が手に入るつと言った具合にだ。

それは、どの魔法少女にも当てはまるものだ。

「ねえ、星空ちゃん？」

「ん？」

「星空ちゃんはいつたいどんな願い事をしてその魔法を手に入れたの？」

葉月は気になったのか星空にどんな願い事をして手に入れたのかと聞いた。

もしかしたら、私達よりも凄いい願い事をしたのではないかと思った葉月だがかえってきたのは以外な言葉だった。

「……………覚えてない。」

「……………え？」

「何も覚えてない…………。」

覚えていない。その一言だった。

あまりにも予想外すぎる答えだったもので葉月達は固まった。

近くで聞いていた鶴乃は少し悲しい顔になって

聞いていた。

「何も覚えてなくて、気付いた時には知らない場所について、よく…分かんなくて、その時に鶴乃ちゃん達とあつて。その後一緒に魔女退治に出掛けたりした…かな。」

「……………」

星空は当時の事を思い出して話し出した。

聞いていた葉月達はなんとも言えないと言った感じで聞くしか無かった。

所謂、記憶喪失。

しかし、星空はまるで気にしていないかのように超特盛炒飯を食べ続けた。

「なんか…ごめんね。辛いこと思い出させちゃったみたいで。」

「別に大丈夫だよ？あんまり気にしていないし。それに…。」

そう言って星空は満面の笑みで葉月達に言った。

「今は鶴乃ちゃん達がいるからさらに大丈夫だよ！」

星空は笑顔で超特盛炒飯食べ続けた。よっほど今が楽しいのか、先程までのより笑顔だった。

星空にとって、友達というのはとても大切な存在だった。

「う〜〜星空ちゃん〜ん！」

「うわあ!?鶴乃ちゃん!?抱きつかないで!食べられないよ!」

聞いてた鶴乃は余程嬉しかったのか泣いて抱きついてきた。

星空はその事に驚いたがそれよりも超特盛炒飯が食べられないので離れて欲しいと鶴乃に言うが中々聞く耳持たずと言った感じで離してくれなかった。

葉月達はそれを見て一瞬呆けたが次第に笑みを浮かべた。

これなら大丈夫だろう。そう思い、そのまま見守っていた。

☆

その後、星空は超特盛炒飯を食べ終えて葉月達と連絡先を交換して家に帰り始めた。

かなり話し込んでしまったため上を見ればすっかり夜だ。

そろそろ、同居人が心配してる頃だろう。

メールを見れば『早く帰ってきなさい』の一言だけ書かれていた。

「やばいやばいやばい。」

星空は全速力で家と走り出した。

流星に長く居すぎたと思いつながら向かった。

その時。

「っ……。」

突如として頭痛がした。

そこまで酷いものではない。だがそれでも痛い。

星空は頭を片手で抑え耐える。

暫く頭痛は続き、漸く収まった。

「何……今の…?」

そう呟く星空だったが左手首に付けられた腕時計を見て慌てて家へと全力で走り出した。

☆

「結構遅かったじゃない。」

「……………ハイ……………」

今現在、星空は正座をさせられている。

理由は明白。帰るのが遅すぎた。

それだけで目の前の人物、『七海やちよ』は腕を組んで星空を見下ろしていた。

記憶が無かった星空をやちよが保護という形で一緒に暮らしている。

「別に話し込むのは構わないけど早く帰ってきてちょうだい。心配したのよ?」

「……………ハイ……………」

「もし星空になんかあったら十七夜になんて言われるか。」

「……………申シ訳アリマセンデシタ。」

星空はやちよの圧力に片言になってしまふ。更には正座をしているせいで足が次第に痺れてきている。暫く説教をした後、やちよはため息をつくと後ろを向き歩き始めた。

「わかったなら次は気をつけるようにね。」

「ハイ。」

「それと、走ってきたからまたお腹すいてるでしょう? 軽食程度ならすぐに作るわ。」

「ほんと!? やつてへブっ!?!」

「……………もう。」

『軽食』と言う言葉に星空はすぐさま反応して立ち上がるが、先程の正座で足が痺れていたため、顔面から床に倒れた。

それを見てやちよは頭を抑えると星空を椅子に座らせ軽食を作り始めた。

ジャンボパフエ、超特盛炒飯を食べて来た後だと言うのにまだお腹がすいているという事に星空の事を知らない人が見れば驚くだろう。

その後、星空は軽食を食べた後、風呂に入り、寝巻きに着替え、布団に入り眠りについた。

今夜はどんな夢が見れるだろうと星空はワクワクしながら眠りについた。

## 始まりのいろは 邂逅

また、不思議な夢を見た。

辺り一面宇宙だった。

そこには翼を持った大きな懐中時計とピンク色の戦艦が飛んでいた。

ピンク色の戦艦は大きな懐中時計を追いかけながら攻撃を放っていた。

大きな懐中時計はダメージを受けながらも負けじとばかりに攻撃をしかける。

そして遂に決着がついた。

勝ったのはピンク色の戦艦だった。

敗れた大きな懐中時計は爆発を起こしながらも墜落する。

しかし、最後の抵抗と言わんばかりに大きな懐中時計はピンク色の戦艦に向かってレーザーを放った。

ピンク色の戦艦はレーザーを右ウイングに受けて大きな懐中時計と同じ様に墜落するが。

ピンク色の戦艦の艦首部分が射出される。

射出されたのはあのピンク色の戦士だった。

ピンク色のロボットに乗ってピンク色の戦士は大きな懐中時計に立ち向かった。

ジリリリリリリリリリ!

「んう?」

目覚まし時計の音と共に星空は目を覚ます。

時計を見れば6時を指していた。

星空はゆっくりとした動きで目覚まし時計を止めるとムクリと起き上がり大きく欠伸をする。

「……また変な夢見た。」

今度は宇宙空間での戦い。

違う所といえば、今回の夢は第三者視点であること。

あの夢はまるで、自分からの視点のようだった。

「朝ごはん食べよ……。」

しかし、いつまで経っても全くわからず、埒が明かないと感じた星空は朝食をとることにした。

星空は朝食を食べ終えた後、やちよに出かけることを伝え、身支度をして出掛けた。

「行つてきまろす！」

「行つてらっしゃい。」

☆

『コチツ…コチツ…コチツ…コチツ…』

『パラツ…』

時計の音が鳴り響く。

それ以外にも紙のめくれる音が響く。

一室に二人の青年がいた。

一人は椅子に腰掛け、本を黙々と読み続ける銀髪蒼眼の青年。

もう一人はベッドに腰掛け、何もせずにいる長い黒髪に赤い眼の青

年。

二人はお互いに喋らず、静かに過ごしている。

途端。

「……………っ！」

彼の頭にビジョンが浮かぶ。

——白いローブを羽織った少女が黒い長髪の女性に襲われている所。

近くにはアルビノ少女がいてその顔に驚愕が現れている。隣にいる変わった形状をした剣を持つ女性も驚愕していた。

よく見ると白いローブを羽織った少女の腕には変わった白い生き物がいた。

「……………行くぞ。」

「わかりました。」

銀髪蒼眼の青年が立ち上がると、ベッドに腰掛けていた青年も立ち上がる。

すると、その青年は身体を紫色の粒子に変え銀髪蒼眼の青年の中へと入って行った。

青年は確認すると、外へと続く扉に向かって行に、その扉を開けた。

【ZIIIO】

閉まる直前、そんな音が聞こえた。

☆

「どっかいこくかな。」

星空はスキップ等をしながら商店街を進んでいた。

星空は成り行きに任せると言った感覚で辺りを見渡していた。

その様子を周りで見ていた人達は微笑ましそうにしていた。

「あっ!!」

ふと、星空は遠くに知っている人物を二人程見つけた。

そのうちの一人は都ひなのだ。

そして、もう一人の人物は星空が最も会いたい人物。

それを確認するやいなや、猛ダツシユでそれに向かって行った。

ひなのは星空が猛ダツシユでかけて行くのに気が付いた。

その人物はまだ気づかない。

やがて、その人物との距離が縮まっていき。

「十七夜さくさくさん!!」

「!？」

星空はその人物『和泉十七夜』と呼ばれる人物に抱きついた。

十七夜は突然の事に目を丸くさせたが、抱きついたのが誰なのかわかると優しく微笑み、星空の頭を撫でた。

「なんだ、星空か。久しぶりだな。」

「久しぶりです!」

星空は嬉しそうに十七夜に抱き着く。

しかし、星空の筋力は魔法少女の姿でなくとも強い。

その為、嬉しくて強く抱き始める。

当然十七夜は、苦痛を感じる。

「か、星空。嬉しいのはよくわかった……。だから少し離れてくれ……。」

「~~~~♪」

十七夜は必死に星空に訴えかけるが、星空は嬉しさのあまり十七夜の声が届いていない。

そう言ってる間にもギリギリと抱き着く力が強くなっていく。

周囲の人もどうやって助けようかと慌てている。

「コラー！・星空ー！」

『ガンッ』

「へぶっ!?!」

突如として星空の頭に激痛が走る。

ひなのがそれを見かねて星空の頭を思いつき叩いたのだ。

星空は、あまりの痛さに頭を押さえる。

しかし、叩いた本人も痛かったのか後ろから「いてて……。」という声が聞こえる。

「す、すまない。助かった……。」

「あーいや、大丈夫だ。……………いてて。」

ひなのはそう言いながら、叩いた手をフーフーとした。

星空は自分を叩いたひなのに涙目で「痛い」と訴えていた。

ひなのは自業自得だというふう「フンっ」とそっぽを向いた。

「君は星空の友達かな？」

「ああ、都ひなのだ。」

「私は和泉十七夜だ。よろしく頼む。」

ひなのと十七夜はお互いに自己紹介をして握手をした。

ひなのは握手し終わると星空へと視線を向けた。

「お前は無駄に力が強いんだから気をつけろ！」

「無駄には無いでしょ?!無駄につて!?!」

星空は涙目になりながらひなのに訴える。  
それを見た周囲の人は苦笑いでそれを見守っていた。

☆

「そう言えば十七夜さんはどうしてここに？」

「みたまに会うのが目的つてのもあつてな。」

あの後ひなのとは別れ、星空は十七夜と共に歩いていった。

星空が十七夜にここに来た目的を聞けば、十七夜はみたまに会おうとしていた事が判明した。

「それともう一つ。」

「？」

「最近、神浜市で稀に怪人を見かける、という事があつてな。ここにもいないかと思つて探しに来てる。」

怪人。

それは神浜の中でたまに見かけるといふ不気味な怪物。

侍だったり、悪魔だったり、幽霊と様々。

やっている行動は主に人命救助。

危ない所に颯爽とやつて来る謎の怪人として知られている。

「んー、でも最近その怪人の話聞かないなあ。」

「そうか。まあとりあえずみたまの所に行こう。」

「はいー！」

星空は嬉しそうに手を上げた後、十七夜と手を繋いでみたまと呼ばれる人物の元へと向かう。

その際、星空が恋人繋ぎしてきて十七夜が動揺した。

☆

「みたまさーん！お客さーん！十七夜さんだよー！」

星空は入口のドアを勢いよく開けて入っていく。

そこにいるのはのほほんとした雰囲気を出す少女がひとりいた。

「あらー星空ちゃん。いらっしやうい。あら？」

のほほんとした雰囲気の少女『八雲みたま』は、星空が連れてきた十七夜の存在に気づいた。

「十七夜も来ていたのね、いらっしやうい。」

「……ああ。」

みたまはそんな十七夜の様子を不思議に思っ、手に視線を向ける。

「あら、仲良しさんね♪」

「〜！か、星空、もういいだろ。ありがとう。」

「?うん。」

十七夜はみたまにからかわれ慌てて手を離す。

星空はそれを不思議に思うが笑顔で答える。

「それで十七夜、今日はなんの用事?」

「いや、みたまの様子を見に来ただけだ。」

「わざわざ心配してくれたの?うふふ、ありがとう。」

(みたまさん達の方が仲良しさんな気がする。)

そんな十七夜とみたまの様子に星空は若干、嫉妬しながらも十七夜のもう一つの目的を思い出した。

「あつ、そう言えば最近話題になってた怪人を探してるって言った。」

「むっ、それもそうだったな。」

「あら?怪人?」

星空と十七夜がそう言うときみたまはふと考え込んだ。

「それなら魔法使いと指輪を合わせたよな怪人が数週間前に来たわよ?」

「!?!」

みたまの爆弾発言に二人は驚愕する。

魔法少女でも無い怪人がここに来る事はないと思っっていたからだ。

「それは本当か!?!」

「みたまさん大丈夫だった!?!」

「大丈夫よ。ただこの姿で魔力の調整ができるか試してみたかったって言っただし。」

「ちよ、調整?」

みたまの発言に二人は疑問を持つ。

しかし、星空は先程みたまの言った爆弾発言に気になるワードを思い出す。

『魔法使いと指輪を合わせたよな』

つまり、その怪人は魔法が使えるということ。

「それ以外は何もしてこなかった？」

「ええ。調整出来なかったことにちよつと残念がってたけど何もしてこなかったわ。」

「そ、そうか。」

みたまの言葉に十七夜は安心しソファに寄りかかる。

それと同時に入口からガチャッと音がして彼方達はそちらに視線を向けた。

「調整屋ー！いるかー？」

「いるわよく。」

「そもそも居なかったら扉開かないよ。」

入ってきた人物にみたまは答え、星空はツツコミを入れる。

入ってきたのはいかにも頼もしそうな雰囲気とがめの少女『十咎ももこ』。ふと、ももこの後ろを見れば見覚えのない少女がいた。

何処かの学校の制服を着て、ピンク色の髪を後ろで結んだ大人しそうな子だ。

その娘はこちらを見るとペコリとお辞儀をした。

「あら？ももこ、その娘は？」

「あ、ちよつと訳ありでな。」

ももこはそう言いながら頭をかく。

ももこがなんと云えばいいのかと悩んでいる中、星空はその少女の元へと向かって行った。

「初めまして！私は、遙花星空。君は？」

「えつと……私は環たまきいろはって言います。よろしくお願いします。」  
こうして原作の主人公環いろはとこの物語の主人公遙花星空は邂逅したのだった。